

玉藻考

大窪 梅子

一 はじめに

葛飾^{かつしか}の真間の入江にうち靡^なく玉藻刈りけむ手児^{てこ}名し思ほゆ 3 四

三三

山部 赤人

二 水底^{みなそこ}に生ふる玉藻のうち靡^なき心は依りて恋ふる此の頃 11 二四八

吾が背子を吾が松原よ見渡せば海人^{あま}をとめども玉藻刈る見ゆ

17 三八九〇

三野 連石守

万葉集には多くの木草^{きぐさ}が歌われていることは周知のとおりである。その数々の木草の中に、水中に生育する草である藻の類が素材となつてゐる歌およそ九〇ぐらいある。

多くの場合上掲の例のように玉藻という呼び方で歌われ、藻に関する歌の半数以上はこの「玉藻」が占めてゐる。「玉藻」とは固有の名で

はなく、普通、玉は美称とされている。この呼び方は古事記や日本書紀には見当らない。両書に見える藻類は古事記に、海布・海蓐（上巻）、日本書紀に憶企都茂（沖つ藻）——神代紀一書、宇弥能波摩毛（海の浜藻）・奈能利曾毛（名告藻）允恭紀等の記載が見えるくらいである。この両書は海辺の物語を相当に含んでゐるが、意外に藻類に関係ある記事は少い。万葉に頻繁に使われる「玉藻」も影を見せない。この語は万葉集という文芸の場においてはじめてめぐりあうことができるのを思えば、やはり諸家の説く「美称（全註釈）」「賞めていふ語（全釈）」「玉は美称（注釈）」というところに落ち着くことになるであらう。もっとも、賀茂真淵はこれと異なつた意見で、「玉藻の玉をほむる語といふはわろし。玉をほむるも物にこそよれ、凡草木に玉といふに子^みこそ多けれ。藻に真の白玉の如き子^み多きを、豊後の海より持来て見せし人あり（考）」と言ひ、略解がこの説を承けてゐる。この説によれば玉は美称というような抽象的意味は持たず、全く形態的に呼んだ名となる。しかし、必ずしも草木の場合にその実をさして言つたものとのみは言えないようである。玉葛・玉松・玉小菅等万葉所出の例

でも、定説のない玉葛は別として、玉松や玉小菅などに真淵のいうような意味があったとは考えにくい。平安時代に入ってから、玉笹（拾遺集）・玉柏（催馬楽・千載集）・玉椿（催馬楽）・玉柳（同・後撰集）などあるが、これらに実のなるものだからという説は決定的な証拠とはなり得ない。玉を冠する語の用例は多いが、その中で玉蔭・玉匣・玉手・玉床・玉の小琴・玉橋などを見ても「玉藻」の玉はやはりその清らかさ、滑らかさ、柔かさ、そして揺れ靡く姿の微妙な美しさなど、外面的にも内面的にも讚美の辞と解した方が自然のように思われる。

藻は水中の草で海水・淡水のどちらにも生育するものだが、周辺海に包まれているわが国の地理的条件上、歌にも海の藻が材料となることが圧倒的に多い。そういう歌の歌われる背景となる地域は東国・東海・南海・山陽・山陰・北陸・西海と粗密の差こそあれ、ほとんど万葉地理の全範囲の海岸に及んでいる。そういう各地に旅をする当時の人々は途上目に入る藻刈の光景に心躍らせ、あるいは大宮人達官人らは公務の暇には浜辺に藻刈りや浜菜摘みを楽しむ。そのような体験を通しての歌が万葉集藻の歌の大半を占めているのである。柿本人麿・山部赤人・笠金村をはじめ都を離れた海辺に藻刈りを歌い、その藻を恋の比喩として歌いあげる作家達は名の判明する者だけでも二十余名それに名を記さない歌の多くの作者達を入れれば万葉歌人の多くが海に川に藻を歌材としたことになる。

万葉の草木の中で、稻・麻・薦・菅などは人間の実生活に関わり深

いものとして歌に詠まれているが藻類もまた生活的関係を多く持つものであった。藻を採取することを今日吾々はトルというが、万葉では「刈る」と言い、藻刈りに関する歌だけでも全体の三分の一を占めている。「藻刈り舟」という歌の句もそういう実態の中から生れ出たものである。また、藻を焼いて塩を採るのは古代の製塩法だが、その労働の中から「塩焼き」「塩焼衣」などの句が歌中に生きてくる。こうした生活性に溢れる藻の歌は後世の歌からは次第に遠のいてゆく。

この「藻に」ついて和名抄に「水中菜也」と註しているが、万葉の頃でも大体水中に生育する草、と考えるのが当時の藻に対する概念であつたようである。歌に詠む場合は藻としての固有の名も用いるが、美称と言われる「玉藻」とか、あるいは「沖つ藻」「川藻」というような場所を示す呼び方、また水中に靡く状態をそのまま「靡き藻」など様々の表現を以てする。固有の名を用いたものはワカメ（稚海藻）・ナノリソ（莫告藻・名告藻）・ナハノリ（繩乗）・ミル（海松）アシツキ（葦附）・スガモ（菅藻）など数種にすぎない。

以上のように、万葉集には藻類を素材とした歌が多いが、その背景として当時の実生活との関わりがあつたにちがいない。次に、そうした解釈に立つて万葉以外の古い文献に目を通してみたい。

まず、古事記や日本書紀であるがこれは上述のように藻類に関する記事は僅かである。むしろ同じ奈良時代初期に計画された各国々の風土記はその点で貴重な資料である。風土記は恐らく全国に進献を命じたものであろうが、続日本紀和銅六年（七一三）五月二日の条に「畿

天平五年成立で今日伝わる唯一の完本といわれる出雲国風土記は、その総記の中に物産について次のように述べている。「山野、浜浦の処、鳥獸の棲、魚貝、海藻の類やや繁く多にして悉には陳べず云々」と。そして意字郡以下各郡中の記事には、山川、原野、海浜、島嶼の名をつぶさにあげ、それぞれの地の物産をかなり綿密に記す中でこの藻類に関する記事が相当豊富に見られる。同国九郡中藻類の記事が見えないのは海岸線を離れている飯石、仁多、大原の三郡だけで、あとの意字、嶋根、秋鹿、楯縫、出雲、神門の六郡は外洋日本海に面し、あるいは内海（宍道湖・中の海）に沿う地であるから藻類の記載が多くなっている。中でも日本海に面する嶋根郡は最も多い。以下風土記自体の記事に順つてまとめてみる。

意字郡——海松あいか
嶋根郡——須我毛、海松、海藻、紫菜、凝海藻の名が見え、中でも海藻は一六カ所及び最後の総括記事、紫菜は九カ所及び総括記事に見え

樅縫郡たてぬい―紫菜、なお文末に「凡て北の海に在るところの雜の物は秋鹿の郡に説けるが如し、但紫菜は樅縫の郡尤も優れり」とある。

神門郡―菜（かまども）（来食の池・笠柄の池）。二ヶ所に池中の菜と見えるが、

次に常陸国風土記。常陸国（茨城県）は東方が長い南北の線にわたって太平洋の波に洗われる。当然海藻は豊富であつたろう。信太郡に乗浜という地名の由来として海苔の名が見え、行方郡なまかたには海松しんぞうのほか「塩焼く藻」と見える。海藻によって塩を採る方法だが、その後の和歌に度々現れる。多賀郡に海藻の名が記してある。

播磨国風土記。播磨は大体兵庫県の南部に当るがこの國の風土記は今日見えるものにはその冒頭に當ると思われる明石郡を欠いている。その他、賀古郡、印南郡、飾磨郡、揖保郡等は海岸地帯に属しているがどういふわけか藻類の記事は見えない。ただ藻類ばかりでなく山野の産物に關しては出雲國風土記のように克明に記載してない。

豊後国風土記は大体大分県に当り東南の海岸部にある海部郡穂門の郷の地名由来に「昔者、經向の日代の宮に御宇しめし天皇、御船を此の門に泊てたまひしに、海の底に海藻多に生れて長く美しかりき。即ち勅りたまひしく、『最勝海藻保都米と謂ふを取れ』とのりたまひて、便ち、御に進らしめたまひき。因りて最勝海藻の門といひき。今、穂門と謂ふは訛れるなり。」と記され、そこに「保都米」という訓が挿入してあるのは注意される。

肥前国風土記。肥前は佐賀県・長崎県にわたって海を周らす国である。神崎郡(佐賀県の東部、有明海北岸)米多の郷に「米多郷郡の南にあり。此の郷の中に井あり。名を米多井といふ。水の味は鹹し。曩者、海藻、此の井の底に生ひたりき。中略 井の底の海藻を御覽して、即て勅して名を賜ひて、海藻生ふる井といひ。今は訛りて米多井と謂ひて郷の名と爲せり。」と「海藻」の記事が見える。松浦郡(佐賀県西北部)には大家嶋・值嘉郷等に海藻・海松の名が記されており、速来の門の條に「海藻早く生ふ。以ちて貢上に擬つ」といつている。(以上海藻に関する訓は古典大系本によった。)

以上、やや繁にわたるが各国風土記の藻類記事中主なるものを抜き出してみた。現存五風土記の山陰・東海・内海・豊後水道・玄海灘に及ぶ沿岸に多く録されている藻は「海藻」、すなわち今日のワカメである。これを以て見れば、ワカメの産はほとんど全沿岸に及んで、当時の人の貴重な食糧源であったようだ。万葉に度々見える藻刈りの歌の多くは、そのワカメを採取する光景であらう。他の海沿いの多くの

国々の風土記が今日に伝来していればその所見はさぞや豊富であるにちがいない。

これら古典に漢字で記されている藻類の幾つかが時代は少し下るが延喜成立(九〇五)の和名抄に訓を示していることは貴重である。

「海藻」に「邇岐米、俗用和布字」とあつて当時の名称や文字にも触れている。「海松、美流、状如松而無葉者也」とその形状に説明を施したものもある。出雲国風土記にも幾つか見える「紫菜」について「紫菜一名石齋、牟良佐岐乃利、俗用紫苔」とあるから同国風土記の「紫菜」と「紫苔」とは同物でともにムラサキノリと呼んだことがわかる。

延喜式は、各式にわたって藻類の名が夥しく見えるが、特に当時の貴族が食料とした品目を記す大膳式には以下のような各種藻類の名が記載されている。

海藻、紫菜、海松、滑海藻、細昆布、索昆布、於期菜、鹿角菜、角俣、稚海藻、大擬菜、青海藻、名乗曾、鳥坂苔、布乃利、荒布、和布その他。大部分が食料となるもののようなが、中には布乃利、角俣のように糊の役にたつものもあり、生活各方面に利用された海藻の名がうかがえる。

平城宮址は戦後、政府の力で本格的発掘が始められたが、そこから出土した数々の木簡類の中にも長門国や下総国又、阿波国などからの貢進物として「若海藻」「海藻」と墨書されたものが発見されている。当時宮廷関係の食用となつた藻類の一端をうかがうると同時に、万

葉と同じ時代に、又多くの万葉作家の生きた場である平城宮の遺跡から発見されたということに吾々は深い関心を払わずにはいられない。

以上の概略によつて古代の文献類に見る海藻が日本人の生活に密接な関係のあったことを知ることができる。そういう実状を基盤としてこそ、万葉集という文芸の広場にまで、藻類はさまざまな関わり方を以て作品の素材として登場するわけである。

二 藻 刈 り

万葉集中藻類に関係ある歌を整理してみるとほぼ二つに分類される。
1は藻刈りの光景。

2は比喩・序詞・枕詞など主として修辭上の材料としたもの。

1はさらに三つに分けられる。A、海人の藻刈り風景を第三者が詠んだもの。B、都から地方に旅する大官人や官人達が自ら藻を刈る歌。C、自己の食料として生活の為に藻を刈る歌。

2はさらに分けて、A比喩・序詞等。Bははじめ藻を実意で叙べ、これを比喩に移行して本意につづけてゆく方法、つまり、実景→比喩→本意、という形である。

1 藻刈り

A、海人という専門の業者（男女とも含めて）が海上で生業に働く光景は、海のない大和から来た大官人達や、地方に派遣される官人等にとって実に新鮮な、美しい光景として目に映じた。

塩干の三津の海女のくぐつ持ち玉藻刈るらむいざ行きて見む

3 二九三 角 磨

玉藻刈る海少女ども見に行かむ船楫もがも波高くとも 6 九三六

楫の音そほのかにすなる海未通女沖つ藻刈りに船出すらしも 7

一一五二

難波潟潮干に出でて玉藻刈る海未通女ども汝が名告らさね 9 一

七二六 丹比真人

これやこの名に負ふ鳴門の渦潮に玉藻刈るとふ海人娘子ども 15

三六三八 田辺秋庭

わが背子を吾が松原よ見渡せば海人少女ども玉藻刈る見ゆ 17 三

八九〇 三野連石守

雄神河紅にはふ少女らし葦附の類採ると瀬に立たすらし 17 四〇

二一 大伴家持

右七例中、七巻の一首と伝不詳の第一首作者以外はみな都から来た官人達である。角磨という人もこの歌と共に記されてある同時の歌から察すれば都の人かもしれない。四首共難波の海辺での作、この歌の次にも海人の釣船が波の高いため浜に帰る来ることを歌っている。原文に「海女」とあるが、当時藻刈りに働くのは女性であったらしく

「海未通女」という語が集中に多い。6 九三六は播磨国行幸従駕の作藻刈りや塩焼きに働く女に魅かれたのであらう、「浪高くとも」はそのういう心情を含む。7 一一五二は作者未詳だが題詞に「摂津にて詠める」とある。9 一七二六は海人処女と交した贈歌で、海人の女に言い

寄ろうとする。これに対して女は「漁する海人とを見ませ草枕旅行く人に羨は及かざらむ」と答える。全註釈は実際の海女でなく遊行女婦の類かも知れないと言っている。

15 三六三八は新羅へ行く使節が大島の鳴門（山口県大島の瀬戸）で、海峡の荒浪に働く海人処女に感動した歌、家郷を出て幾日、この場合の海人処女には作者の妻を恋う郷愁が反映していたかもしれない。17 三八九〇は大宰帥大伴旅人の帰京についてゆく従者らが海路で詠んだ歌である。

17 四〇二二は大伴家持が越中国守として在任中公務の旅の途次雄神河（礪波市の庄川）で葦附という淡水の藻を採っている少女を見て詠んだもの、海の藻刈りでなく河中の藻刈りとして珍らしい歌である。

集には海人を歌ったもの約九〇首、そのうち海人処女は二〇首ほどある。単に海人という男を指す場合が多いが、女が含まれることもあったようだから実際には海人の活躍場面には女性もかなりいたと思う。

海の仕事は漁業と運航に携わるのであるが中でも藻刈りは漁業の半ばを占め、海人処女はその大半を背負うていたのであろうと思う。今も北海道で利尻昆布を採取する海女は海底で昆布を引き抜き、束にして抱えて浮上してくる様子をテレビで見たが随分な重労働であろう。万葉時代の海女の藻刈りがどのように行われたかは知らないが、いづれにしても海底に入っている藻刈りの仕事は女にとっては、いかに生業とは言え力にあまる労働であつたろう。が、彼女らはその苦痛に堪え、

或は乗りこえて甲斐甲斐しく働く。都の中に生活して明け暮れ人間の目をうかがい、己が心を折り曲げて時には虚飾をよそおわねばならぬ都会文化の憂鬱に疲れた人々は、稀に大きい海上風景に接し、その広々とした世界に命を張って働く若い処女達に驚異と憧憬さを感じたのではあるまいか。「海人をとめ玉求むらし沖つ浪恐き海に船出せり見ゆ6一〇〇三」は、「遙に海人の釣船を見て」作つたという。「わたつみの沖つ白浪立ち来らし海人処女ども島隠る見ゆ15三五九七」は新羅へ行く使人が海路で詠んだ歌、「潮満たば如何にせむとか方便海の神が戸渡る海部末通女等7一二一六」などには作者の抱く不安感と共に海人処女らの労働の厳しさがよく窺える。こういう光景に触れた時、都から来た、人間の塵埃に泥れた人達がどれほどの新鮮感と厳しさに胸をうたれか。

B 行幸に従つて旅する大宮人や地方へ派遣される官人達、また遠く旅ゆく人らがなかば遊樂的に藻刈りに興じることがある。

鉏著く手節の埼に今日もかも大宮人の玉藻刈るらむ 1 四一

柿 本人 磨

いざ子ども香椎の渦に白妙の袖さへぬれて朝菜摘みてむ 6 九五

七 大 伴 旅 人

時つ風吹くべくなりぬ香椎渦潮干の浦に玉藻刈りてな 6 九五八

小 野 老

時つ風吹かまく知らず阿胡の海の朝明の潮に玉藻刈りてな 7 一

一五七

玉匣くしげいつしか明けむ布勢の海の浦を行きつつ玉藻拾ひろはむ 18四〇

三八 田 辺 福 磨

宇治川に生ふる背藻を河早み取らず来にけりつとにせましを

7 一一三六

これらは常日頃は手も染めない藻刈りという業わざを、たまたま旅中の興によつてするのであるから「海人少女玉求むらし沖つ波恐き海に船出せり見ゆ6 一〇〇三」というような不安な条件のもとではやらない。1 四一の人麿作歌は伊勢行幸に従駕した大宮人達が藻を刈つて楽しむ模様を作者が在京の身に想像して詠んだものだが、このような海辺従駕の旅には宮廷人達も磯遊びをやる場合がしばしばあることを承知していたからであらう。七卷「羈旅にして作る」歌群の中にもそれの類と思われる幾つかの歌を含むが「黒牛の海紅にはふももしぎの大宮人し漁あさすらしも7 一一二八」は左注に「藤原卿作」とあるから、(藤原房前或は麻呂ではないか)やはり行幸従駕の際の磯遊びを詠んだものである。又九巻には大宝元年十月紀伊行幸の時の従駕者の歌と思われるものが十三首あってその中にも従駕の官人達が海辺に清遊する数首があり、海辺行幸の際の藻刈りは大宮人達にとって快適な遊びであった。

必ずしも行幸従駕でなくとも地方に派遣される官吏達にとつても公務の余暇の楽しみとして浜遊びはしばしば行われた。次の二首は大宰府の帥大伴旅人が在任中の冬、府の官人達と香椎廟に参拝しての帰途香椎の浦に遊んだ時のもので、朝菜は朝食の料にする海藻だらうが、

それなくては食に事を欠くというものでなく楽しんで朝食に供する意味である。参拝後の寛いだ気分では浜菜を摘んでいるさまは「白妙の袖さへ濡れて」にも現れている。次は布勢の海(富山県、氷見市にその遺址がある)に、作者が守大伴家持の興庇で遊びに出かける前日、

名勝布勢の海のことを聞いて主人役大伴家持と交した歌の中の一つで、いわば布勢の海遊覧の前奏曲中の一節である。当然「玉藻拾はむ」というように、遊興的にしか考えていない。7 一一三六は背藻という名の淡水藻であらうが実物は明かにされていない。仙覚の万葉集注釈には「スカモトハ、スケニ、ニタル河藻也。人ノクフモノトイヘリ。」とあり、伊藤多羅の万葉動植考には「すかもは丹生郡萩原の里人のいはく今もすかもとて河にも池にも多き緑りにて綿のことくなる藻なり(中略)夏の日のあつきときには水ながらも酔なとつても心ふとをくふことにくふいと涼しまたかわきたるは海の青のりにもまけず今は河池に名をつけわきて河のをかはもづくまたあをさとも云ふ。」と説明している。同じ名のものが出雲風土記嶋根郡法吉の坡の條には「須我毛」と記され、「夏の節に当りて尤美き菜あり」と説明あることは上に記した。いずれも食用になることを説いており、この場合も宇治川のみやげにしたいと思つて採らうとしたが流れの早いために採ることができなかったのを嘆いた歌である。

上述のように、旅人たちは旅の途上で、興趣に駆られ、或は家庭や知人らへのみやげものとして海や河中の藻を採取した。それらを歌にするというところに藻に対する愛着が深かったのである。

C これは、AやBなどの場合と異なり、作者が自分の日々の食にあてのために自ら海辺に立つて藻を採集するという非常に切実なものである。

打ち麻を麻績王海人なれや伊良虞の島の玉藻刈ります 1二三
うつけみの命を惜しみ浪にぬれ伊良虞の島の玉藻刈り食す 1二

麻 績 王

前の歌の題詞に「麻績王の伊勢国伊良虞島に流さえし時、人、哀傷して作れる歌」とあり、後の歌には麻績王の聞きて感傷して和ふる歌」とある。麻績王の系譜は不明だが天武四年の紀に「三位麻績王有罪流三千因幡」とあり一子も各伊豆島・血鹿島に流されたことが見える。題詞には伊勢国と記してあるが、通常は、愛知県（三河国）渥美半島の先端伊良湖岬と見る説と合わない。或は伊勢国から見ても事であろうか。王の配所については万葉の外、前記天武紀の因幡説と、常陸国風土記行方郡板来村説と異伝があるが水辺であったことは歌から理解できる。前歌の作者は王とどういう関係か、又いかなる身分の人か不明だが、王の流寓生活を親しく目にしている身近な人かと想像される。「麻績王海人なれや」という強い言い方の裏には、海人でもない王が、あたかも海人であるかのように海藻を自ら採って食べ料としないてはならない矛盾へのいぶかりが激しく渦巻いているような語気である。つまり、王への痛切な同情がこの句をなさしめている。

その人の同情を聞いて、当の麻績王の和えたのか1二四である。この歌は、その日の生きる糧として藻刈りする人自らが詠じたものであ

る。集中に藻の歌は多いがこういう歌はまことに特殊な立場で詠んだもので稀な一首として注目すべき歌だと思ふ。「うつけみの命を惜しみ」は前の歌の「麻績王海人なれや」の激しい内憤に答えた作者の静かな、そして悲痛やる方なき言葉と解される。田畑や、機織り、その他の生産又は労働などに関しては就労者自らの歌、あるいはその立場において作ったと見られる歌も幾つかあるが、海の生産に携わる海人自身の働く歌と思えるものはあまり見えない。海人の藻刈りする歌は、前掲のように数々あるが、どれもみな海人自身が歌っているものではなく、海人の日常生活とは縁遠い都あたりの第三者が、たまたま旅の途上で目に触れた光景を客観的に歌ったものである。

だが、これら二首の場合は藻刈りするの海人ならぬ、およそそういう仕事には無経験な身分の人が、しかも流刑者という特殊な立場に置かれて、今日の食料のため、必要やむことを得ず迫られて藻刈の労働に働くのである。もし不慣れな者が働くとしても田畑や山野であるならばいくらかでも馴染み易いであろうが、浪風と争っても今日の食を得るための海の仕事は痛いほどに心身を苦しめることであろう。万葉に流刑者の歌も幾つか存するが、いずれも恋情の詠嘆である中に、この歌に切羽詰った実生活が歌われていることは異色であり、それだけに特に着目すべき歌だと思ふ。

靡き藻の心

2は一首の中で藻は本意を誘い出す、いわば助演者で、比喩・序詞

・枕詞として使われる。さらに、表は藻を歌うかのように裏には別の意味を托しているもの、七巻に「譬喩歌」と記されているものなどをここに一括した。この部も亦、大別してA B二つに分ける。

まずA、一首の一部に藻を出して、これを本意の比喩又は序詞とするもので巻十一に見える「物に寄せて思を陳」べるという方法である。

〔水底に生ふる玉藻の〕うち靡き心は依りて恋ふるこの頃 11二

四八二

の「」で囲んだ部分が比喩の物で、傍線が本意との連絡の役を果す句である。「靡き」という語は上の藻の状態を述べる語であると共に下の本意に対して同じような状態にあることを述べる。こういう方法を万葉の歌人達は好んで用いた。十一巻・十二巻などにはこれを一つの部立てとして多数の物に寄せて相聞の情を歌っている。藻類もその一つである。

敷たへの衣手離れて玉藻なす靡きか寝らむ我を待ちかてに 11二

四八三

わたつみの沖つ玉藻の靡き寝む早来ませ君待てば苦しも 12三〇

七九

荒磯やに生ふる玉藻のうち靡きひとりや寝らむ君を待ちかねて

14三五六二

紫の名高の浦の靡藻の心は妹に依りにしものを 11二七八〇

明日香河瀬の玉藻のうち靡き心は妹に依りにけるかも 13三二六七

浪の共靡く玉藻の片念に吾が念ふ人の言の繁けく 12三〇七八

前の三首は形態上の比喩に、後の三首は心理的な比喩に藻が使われる。前者の場合は女の上に、後者の場合は男女に通じて、心を靡かせる意味である。しかし前者の場合、ただ一例人麿作の2一三八に「靡き吾が寝し（原文、靡吾寝之）」というのがある。文字のままに訳せば靡き寝るのは、男の方であってつまり人麿自身ということとなり特別な例となる。これについて、武田祐吉博士はその「万葉集全註釈」に「前の歌（2一三二）では依宿之妹乎となっており、玉藻ナスは、妻の修飾になっていた。この伝来では、作者自身が靡いて寝たと言っている。しかし男子が靡き宿シというのはおかしいことであり、また玉藻のように靡くということは、人麻呂の歌には常に婦人の上にいることであって、自分が靡いて寝たというのはまさしく伝え誤ったものと認められる。また下の句に対して靡き吾が寝シ妹が手本マではよく続かないのである。」と「靡吾宿之」を誤伝と見ている。

これに対し、澤潟久孝博士は「万葉集注釈」で、これを誤伝とせず、作者の修辭推敲の段階で、この句が初めに出来、それが二転三転してついに「玉藻なす寄り寝し妹2一三一」に到達したものと見ていられ、結局はやはり靡き寝シは女の方ということ落ち着く。

この「靡く」という、藻の歌に最も多く使われる語を集の中に探してみるとおよそ五〇例、そのうちの約半数が藻に使われ、さらにそのまた過半数が比喩の歌である。この表現を使う最も早いものは、作者明記の作品では柿本人麿である。人麿は藻を恋情の比喩に度々用いるが、

比喩と本意を結ぶのに「靡く」を五回も用いている。人麿が藻に関する歌九首の中で実意で貫徹しているものはわずか一首だけであとは枕詞、又は比喩である。その比喩と本意を結ぶものが「靡く」である。人麿は藻のほかにも、旗の靡き、野毎につきてある火の風の共、靡くが如く(2一九九)・塞樹おし靡べ・篠を押し靡べ(1四五五)・旅人うち靡き(1四六)・靡けこの山(2一三一・二三九)など種々な場合に使い、「靡く」の全例の五分の一を一人で占めている。もしこれに人麿歌集の四例を加えれば三〇パーセントの数となる。藻の用例は人麿がそれ以前のものを取りあげたのか、或は自体の発案かはつきり言えないが、人麿によって効果的に、しかも多用されたこの比喩法は後々に伝承されていつか類型となつていったのではないかと思う。

次に同じく物に寄せて思いを叙べるに意味を離れて音の類似による、序詞がある。

一 海の底沖を深めて生ふる藻の最も今こそ恋はすべなき 11二七八

みさごある磯廻に生ふる名乗藻の名は告らしてよ親は知るとも

3三六二 山 部 赤 人

大海の沖に生ひたる繩苔の名はさね告らじ恋は死ぬとも 12三〇

八〇

神風の伊勢の海の朝風ぎに 来寄る深海松 夕風ぎに 来寄る

また海松 深海松の深めし吾を また海松の復行き反り

妻と言はじとも 思はせる君 13三三〇一

第一の生フル藻は最そのモを引き出す為の序、次の名乗藻(莫告藻)は由来が允恭紀に見える。衣通郎姫の歌「常しへに君も遇へやもいさなとり海の浜藻の寄る時々を」を聞かれた天皇が、この歌は他人に聞かせてはならぬ。もしも皇后が聞かれたら必ず恨まれるだろう、と言われたので時の人がこの浜藻を「奈能利曾毛」と謂った、と記している。この命名由来の話が真実かどうかは別として、古くナノリソと呼んでいた藻のあったことがわかる。万葉に出る十三首全部「莫告る」即ち告る勿れ、或は又「名乗る」即ち名ヲナノルの意味に使われる。似たようなのがナハノリ——繩乗で、これも例歌のように「名は告り」と通じて使われる。ただ、前者の場合はナノリソという名のもものが上記の由来によるものとすれば、単純な同音関係とは言えないが、万葉では、一応由来そのものとは別にナノリソ——莫告藻・名告藻、という同音の関係として序詞に使われた、と見ていいであらう。ナハノリの場合は、形態からつけられた名のようなものであるから、これは純粹にナハノリ——名は告り、と意味関係によらない音の関係としていいかと思う。この他「深海松の深めし」「俣海松の又去き」などは海松そのものでないから間接的な使用である。

四 人麿の玉藻

B 同じく比喩(又は序詞)であるが、Aは短歌の場合であるに對しこれは長歌に使われる手法で量的に比喩の部分が多く又質の上からも綿密の度を加えている。初めに実物としての藻の生態をかなり精し

く描き出し、その写象の効果を利用してこれを比喩に転じ、さらに本意へと移り進んでゆく方法である。この手法は十三巻や六巻の長歌にも使われているが今の場合十三巻の藻に関するものを挙げる。

神風の 伊勢の海の 朝風ぎに 来寄る深海松、夕風ぎに 来寄る俣海松 深海松の 深めしわれを 俣海松の 復行き反り 事

と言はじとかも 思ほせる君 13三三〇一

前記の歌だが、深海松・俣海松は上部で実物として伊勢の海を背景に描き、それを「深海松の」「俣海松の」と枕詞に移して本意の「深めし」「また去き反り」にかかる音上の関連とする。

春されば 花咲きををり 秋づけば 丹の穂に黄つ 味酒を 神名火山の 帯にせる 明日香の川の 速き瀬に 生ふる玉藻の うち靡き 情は寄りて 朝露の 消なば消ぬべく 恋ふらくも しるくも逢へる 隠妻かも 13三二六六

この歌の初め十句は明日香川の実態叙述であり、その中の藻をとりあげて隠妻の比喩にしたもので、十七句中の半ば以上を比喩に使っている。六巻の同類歌は平城京時代に属するが、この十三巻は奈良時代初期以前のものが多くと見られるから、かかる手法はかなり古く行われていたものであろう。藻以外のこの形式の比喩は「こもりくの 泊瀬の河の13三二六三」に始まる長歌の左註にあるように古事記下巻には木梨輕太子の作と伝えられている歌中に存している。

次はこの手法の最も著しい例である。

飛ぶ鳥の 明日香の河の 上つ瀬に 石橋渡しし一に云ふ 下つ瀬に

打橋渡す 石橋に一に云ふ 生ひ靡ける 玉藻ぞ 絶ゆれば 生ふる

打橋に 生ひををれる 川藻ぞ 枯るればはゆる 何しかも

わご王の 立たせば 玉藻のまころ 臥せば 川藻の如く 靡か

ひし 宜しき君が 朝宮を 忘れ給ふや 夕宮を 背き給ふや う

つそみと 思ひし時 春べは 花折りかざし 秋立てば 黄葉か

ざし 数棹の 袖たづさはり 鏡なす 見れども飽かず 望月

の いや めづらしみ 思ほしし 君と時々 幸して 遊び給ひ

し 御食向ふ 城上の宮を…………… 2一九六

これは明日香皇女の殯宮の時に柿本人麿が作った長歌で、反歌二首を伴う作品である。人麿作品の中でも高市皇子の薨去を悼む長歌（2・・・）に次ぐ大作である。

明日香皇女は天智天皇の皇女で文武四年（七〇〇年）の薨去、この歌によれば配偶者が在られたようだが、どういう人か明かではない。

歌中には夫婦親睦の情が、その日常生活を通してのべられているから皇女の薨去はその夫君にとっても打撃であつたろう。作者人麿が、歌中に綿々と叙べる伉儷の睦じさは、作者と皇女との間柄が、皇女の奉仕者であつたからか、又は宮廷における殯宮の儀礼に仕える者としてであるか、あるいはその二つの立場を合せ持つ者としてであつたか、いずれにしても、作者としての入麿は、そういう宮廷関係者としての立場にとらわれず、人間としての心情の内奥に立ち入って皇女の死を悼んでいるようにうけとれる。

七五句に及ぶ長い歌の前段二〇句ほどは、「靡かひし」に懸る比喩

部である。さらにその二〇句は三つの部分に分れ、はじめの六句にはこれから歌の背景となつて展開する明日香川の模様を叙べる。もとより、明日香川をこの作品に出したのは歌作上の一つの設定ではあろうが、これが明日香川でなくてはならない意味は皇女の御名と同じ名を持つ川だからである。この場合明日香川は単なる自然の川ではなくて、それは皇女の象徴とも言えるものである。長歌のあとの反歌「明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水ものどにかあらまし 1一九七」

「明日香川明日だに見むと思へやもわご 王の御名忘れせぬ1一九八」を読むと、作者がこの歌に取りこんだ明日香川は皇女の靈魂のたゆたう川と見たのではない。しかしその明日香川を叙する初めに13三二六六のように花や黄葉で初頭を起さず、それは後の部の皇女の夫婦生活の方に譲り、川としては人の踏み渡る石橋や打橋で現実的に叙べ、次に、その石橋や打橋に生えて流れに靡く川藻を捉え、その藻の死滅することなき長久性を強調する。最後の六句に至つて、初めてさういふ河中の藻の揺れを以て、立ち居振舞やさしくたおやかな皇女の姿形の比喩に転じつつ皇女の夫妻間の生活に筆は連んでゆき、やがて目的の哀悼歌の調子となつてゆく。

この前段二〇句の藻の叙述の中に、皇女の死の伏線として水中の藻の生々不死を語り、皇女の現し身の美しさを描いて、あたかも相聞歌のような華麗な句々を積み重ねてゆく。上掲の部分はこの長歌の半ばを越えた分量であるがなお挽歌の気配もうかゞえない。しかし玉藻川藻を細かく描いて、その玉藻のような皇女の美しくたおやかなイメージ

ジを充分ならしめたことは、急転して薨去に至る哀切な終曲に極めて効果的であつた。

もしこの挽歌に冒頭二十句の明日香川の藻の叙述がなかったとすれば二二句以下の三分の二は、たとえ皇女の夫婦愛を美しく述べているとは言え、体よくまとめられた一とおりの挽歌という評価に尽きるであらう。

人麿はこれより前、川島皇子薨去の時、泊瀬部皇女忍壁皇子に献る挽歌を作っている。(2一九四)これは前掲の七五句よりはるかに短かく二九句の長歌であるが、その初め八句をやはり明日香川の玉藻を叙べることにあてている。

飛ぶ鳥の 明日香の河の 上つ瀬に 生ふる玉藻は 下つ瀬に
流れ触らばふ 玉藻なす か寄りかく寄り 靡かひし 婦の命
のたたなづく 柔膚すらを 剣刀 身に副へ寝ねば……2一九四
と、ここには上つ瀬・下つ瀬の藻の状態は簡単に述べて、その玉藻を直ちに比喩に化してしまふ。2一九六から見るとかなり簡略である。作歌時期からいうならこの歌の方がかなり早いから、作歌の時点ではこれだけ描写をして、比喩・本意へと移つてゆく手法は人麿としては新しい試みであつたかもしれない。ところが十数年を経て明日香皇女薨去の時の挽歌にはこの手法を用いながら、同じ明日香川の叙述も、さきの挽歌より一層精密に、一そう情熱的に河中の藻を描写して本意へと運んでゆく。作者として可能な限りの表現力を以てこの大作に挑んだ意欲は作歌生活の極限がもう迫っていたのではないかとさえ思う。

石見の海 角の浦廻を 浦なしと 人こそ見らめ 濁なしと云ふ
磯なしと 人こそ見らめ よしゑやし 浦は無くとも よしゑやし
濁は一に云ふ 無くとも 鯨魚取り 海辺を指して 和多津の 荒
磯は磯は 磯の上に か青なる 玉藻沖つ藻 朝羽振る 風こそ寄せめ
夕羽振る 浪こそ来寄せ 浪の共 か寄りかく寄る 玉藻なす
寄り寝し妹をよし妹がたもとを 露霜の 置きてし来れば……

2 一三一

これは題詞に「柿本朝臣人麿、石見国より妻に別れて上り来る時の歌二首 并に短歌」とある、その始めの方の長歌である。この一連のあとに或る本の反歌が一首あり、さらに第二首の長歌二一三五とその反歌二首が続き、終りに「或る本の歌一首并に短歌」という長歌一首（二一三八）と反歌一首がある。この最後の長歌は大体初めの長歌と類似しており、別伝ともいふべきものらしく、この合計十首が妻に別れて京へ上る時の歌である。

上に掲げた二一九六は作者とは身分を異にする皇女を主題にしたもので、しかも挽歌という人生最大の悲しみの場で歌われたものであったのに比し、これは作者自身の妻に向けた恋情を綴るごく私的なものである。だが、この全く異なる作歌動機によって作られた二つの歌に、どちらも藻が作品の重要な位置を占めている。この二一三一は二一九六の制作時代より後で作られたとすれば、作者人麿は明日香川の藻の観察によって生み出した、描写―比喻―本意、という手法を三たびここに取り用いることによって相聞歌としての効果を一層高くし得る自

信を持ったのではないか。そして前回よりもさらにスケールの大きい海辺を背景に、河中の藻には見ることでできなかった生動的な青い藻の動揺するさまを浪間に熟視するうちに、そこに重なりあうごとくに浮び上ってくる妻の姿態を見たのではなかったろうか。

この歌の構成三九句という分量は二一九六に比べれば約半分ではない。それは皇族の死を悼む挽歌であるから生前の業績とか経歴などを讃えねばならず、しかももし猷呈歌ならばとくに丁寧に歌いあげなければならぬ。そういう条件のもとで七五句という長さは過剰なものとは言えない。その七五句中に比喻として費す二十句も全体から言えは甚しい不均衡とは見られない。だがこの二一三一は私的でありしかも相聞歌である。諫々と長きにわたることはむしろ避けた方がいい。全体を三十九句という長さにおさめるのは至当である。が、その三九句中の二二句を、一首としてはむしろ前奏曲ともいふほどの比喻にあてることが、通常から言えは不均衡の感がある。しかし、作者はその不均衡と見えるまでの多くの句に、あらゆる表現方法を以て眼前の藻を描き出す情熱を注ぐ。そうしなければ、自分の胸に熱く灼きついている妹の真の姿を言い表わすことはできなかったのである。その初め十句に点じた角の海岸の曲折陰影に富む叙述、次の十二句の真つ青な藻が浪に風に煽られる躍動的な描写、そういう丹念な表現を比喻に移してゆくことによって妻の姿が生き生きと甦ってくるのである。そこに使われる「か青なる」「玉藻沖つ藻」「朝羽振る風」「夕羽振る浪」の美しい句も、決して単なる美辞の重なりでなく、そういう句々の中

に妻への愛情が浸透しているようにさえ思われる。

それほどの愛を注いだ妻、題詞にも「妻に別れて」とあるのだから、短い旅中に親しんだようになりその間柄の女ではなく、或る期間夫婦らしい生活をした対手であろう。歌にのべるような藻と妹とのかわりあいから察すれば人麿の内奥に深く結びあう人であったにちがいない。この長歌には、眼前の藻を比喻として妻の現し身を描くが、反歌二首、ことに後の「小竹の葉はみ山も清にさやげども吾は妹思ふ別れ来ぬれば2一三三」において人麿の心を占有している妻その人は、単なる肉体的、生活的関わりの上の、いわゆる「うちの女房」式妻ではなく、かなり内面的触れあいの深い間であつたように思う。

この歌の角という海岸は島根県江津市の都農津という所である。東方江の川の河口から西へ十数キロの海岸は、大崎鼻とか、赤鼻・唐鐘という小さい崎が突出する程度の坦々と直線の続く浜辺である。当時の海岸線と今日とはいくらか違うようだがやはり歌中に言う「浦無し瀉無し」は、今日もそれに近い荒寥とした感を湧かせる。人麿が国庁（島根県国府町）に任務を奉じていたとすれば、庁を出て後に妻の住む角の里の浦を過ぎていったことになる。季節はおそらく晩秋の頃であつたろう。この時の第二首目の長歌（2一三五）に「……顧すれど大舟の渡の山の黄葉の散りの乱に妹が袖清にも見えす云々」と歌っている。この地方ではもう冬に近い寒さであつたろう。

別れて来たばかりの愛妻のやさしい姿を臉に浮べつつ、その柔かな肌さえまだ生々しい感触のまま魂の脱けたように波うつ角の海の汀を

歩いてゆく。もしこの時、人麿が尋常の歌人であつたならその足もとに波風に揺られつつ寄せて来る藻を見ても、直ちに「寄り寝し妹」の比喻として表現したであろう。比喻とする前にその背景をなす荒寥たる海岸の風景や、風浪に弄ばれる藻の細かい観察に深くは入り得なかつたであろう。人麿作と記す歌では、自然を作品の主題にこそしないが、種々な作品の中で人間の在り方や心情を叙べるために実に自然を巧みに描いて人間と自然との混然とした融合の相を現している。この角の海岸叙述の場合も同様であつて、大きい海岸風景、生彩ある藻の描写の見事な叙述は、知らず知らず読む者をして彼の心象世界に深く踏み入らせてしまうのである。その心象の無限な奥行、歌に運んでゆく息の長さはやはり人麿の独壇場と言つていいであろう。普通ならば「寄り寝し妹」を比喻するにこれほどの精力を費し、長句を案出しなくても充分通じるところである。事実、人麿の作にも大和に在つて妻が死んだ時の挽歌にその妻を叙べて

……隠りのみ 恋ひつつあるに 渡る日の 暮れ去くが如 照る
月の 雲隠る如 沖つ藻の 靡きし妹は……2二〇七

と極めて短かい枕詞として使っており、2一三一の次にある同じ時の長歌（2一三五）にも藻の比喻が冒頭にあるとはいへ、この2一三一の歌ほどに長く、力を入れたものではなく、石見の海の韓の崎の海石に深海松の生うること、荒磯に玉藻の生うることなど八句をついやして「玉藻なす靡き寐し児」と本意に続けるのみである。同じ三九句ではあるが2一三一が妻への衝動的な慕情を一首の主情としているのに

対し、この方は全体に、別れた妻への思慕を抱きつつ行く旅情を主としてしているようである。作歌はほぼ同じ時であろうが、同一の題材・心情を、広く深く多面的に歌いこなす能力は人麿独得である。

おそらくこの石見の相聞歌は人麿の人生の終局が近づく道程において作られたと思う。人麿の死の年は確認されていないが、大方の見るように藤原宮終末前後とするならば、人麿の生命の燃焼はこの歌の中に最後の焰をあげたと言える。

万葉に数多い藻の歌の中で、生命的な把握を以てこれを文学性豊かに見事に作品に形成し得たのは人麿であつたと思う。藻という植物は、人麿のこれらの作品によって、はじめて文芸的に高い価値を与えられたと言つても過言ではないと思う。

(本学教授 文博・国文学)

「全註釈」——武田祐吉著万葉集全註釈

「全釈」——鴻巣盛廣著万葉集全釈

「注釈」——澤瀉久孝著万葉集注釈

「考」——賀茂真淵著万葉考

「略解」——橘千蔭著万葉集略解